



環海異聞

一

洋学文庫  
文庫8  
A 202  
1





環海異聞序例附言



寛政五年癸丑の冬我仙臺の舟子等江戸へ運送乃  
糧を載せ其十一月廿日其舟を牡麻郡石巻港に  
開帆して奥州岩城に海上に逆風不遇ひ洋中に  
漂ふ事数日翌甲寅の夏六月初旬極北の僻島に  
キヨフホク 近時魯西亞国より併せ有るの所とす故に在留  
シテレーツシと 近時魯西亞国より併せ有るの所とす故に在留  
此島北亞墨利加洲 此島北亞墨利加洲の僻島に在留  
係るべき諸島の云々 係るべき諸島の云々  
の本國人漂客等を憐んで撫育を加ふ依り  
是をより留む事十箇月餘翌乙卯四月

海島人

不詳由の島

初旬本国船四棹の便哉以て漂人等をも内地へ

連れ送り其六月下旬「オホーツカ」といふ港に着

岸是本領の東方向き不有の境は我蝦夷クナシリ嶋より細細洲海上一百六十里西成ニ中ルに係る土地あり

頭目の類待は遇ひ其秋八月より翌丙辰夏秋の交

に至るまでヤリシヨにヤリニてヤリニて我衆を同行十五人相分れて

三々度不出立に前程「ヤコーツ」等の諸地を経て

数百里の旅行西南にむかひて「イルコツ」西地共ニ  
亜細洲

里係る上首の地こつ所こつ所こつ同行漸ヨウ々コ々ツ相集

て其地縣吏の撫育を得て滞留する事凡

八年寛政八丙辰の年より享和二癸亥の春は

至りし其三月本國の帝都「ペトルカ」といふ所より

漂客等上都の王命下りてイトコイ辭して数千里

の行途「スコウ」莫斯科モスクワよりキナ都ト度教譜云北極出地五十九度

分等を経て北行し其四月の末新都に下り着き

度教譜云新都「ペトルカ」北極出地五十九度重役人國老の家を容館カクと

敷日滞留せし間厚き款待して日々酒食を

安撫し衣服皮褥を賦興したるの類懇心奉送

国王一日謁見をもヤメ都下の一見等ミヤコふホソ

さて残す所あり

日本へ使節を遣むとすその六月に未だ帆の

使舸を以て漂客津大夫儀平左平太十郎の四人

を護送す本船其本領の要港カナスダとて取ら

用帆し弟那瑪尔加國の船を留めて諸用を辨し

夫より諸厄利亞國の一港に暫く滞留

ありて發して加那里亞嶋其地亞利加洲に係る所謂福島に

着岸五六日船を留む夫より赤道直下を經過して

南亞墨利加洲伯西兒に着船滞留数月翌文化元

年甲子の歲其大洲を廻り針路を西に取り

ゲイサ亜墨利加西海中に在るの僻島あり嶋に船を寄せ暫く日あり

て復西北に距川に再び赤道直下の海上を渡り

るれより又カニベイツを歴たれより北して亞細亞洲

東北の尽境カミシヤトツカとて所に着岸此れ彼國

近來其所有とすの地あり此所に滞留數日

其秋を發して船路を南に取れ我蝦夷地の

沖より本邦の南洋を走りて其九月六日

肥前國長崎海口に着る癸亥六月彼國を

發帆して甲子九月長崎へ着きたる迄歳二ヶ  
 年月ハ十六ヶ月なり

魯西亞使節船

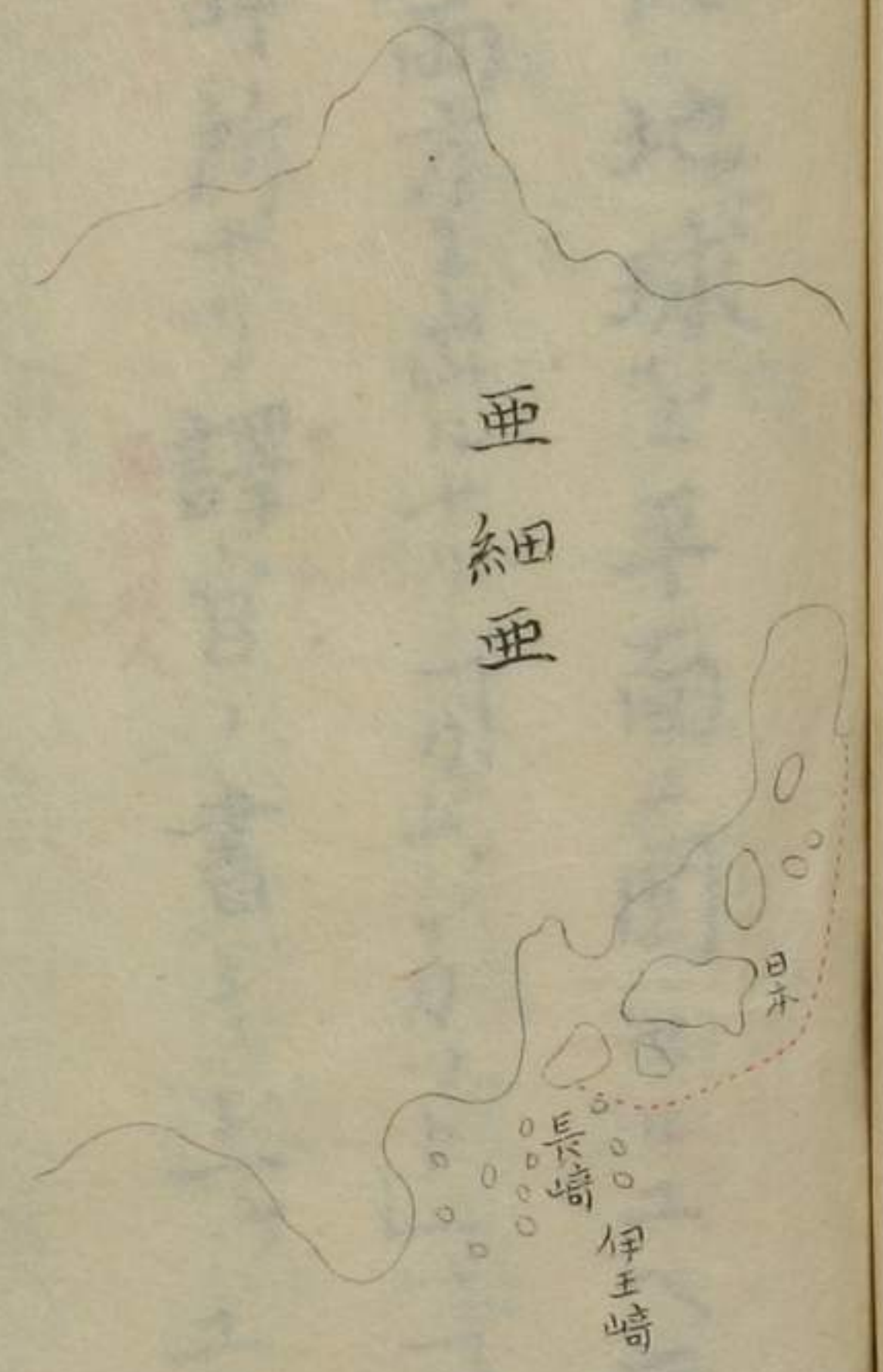
本邦渡海せし船路於長崎書きつけしと云  
 略圖

舟行の道々節を示きたるは五大洲を以て  
 せし畧繪圖と見ゆ



便高木御取上げあり、  
 五月長崎より歸帆せり、  
 御請取也、  
 八ヶ岳山の上の御取に  
 前并に御取に書  
 在右の御取に書  
 按に地球を平南  
 北に書きたるに

亞細亞

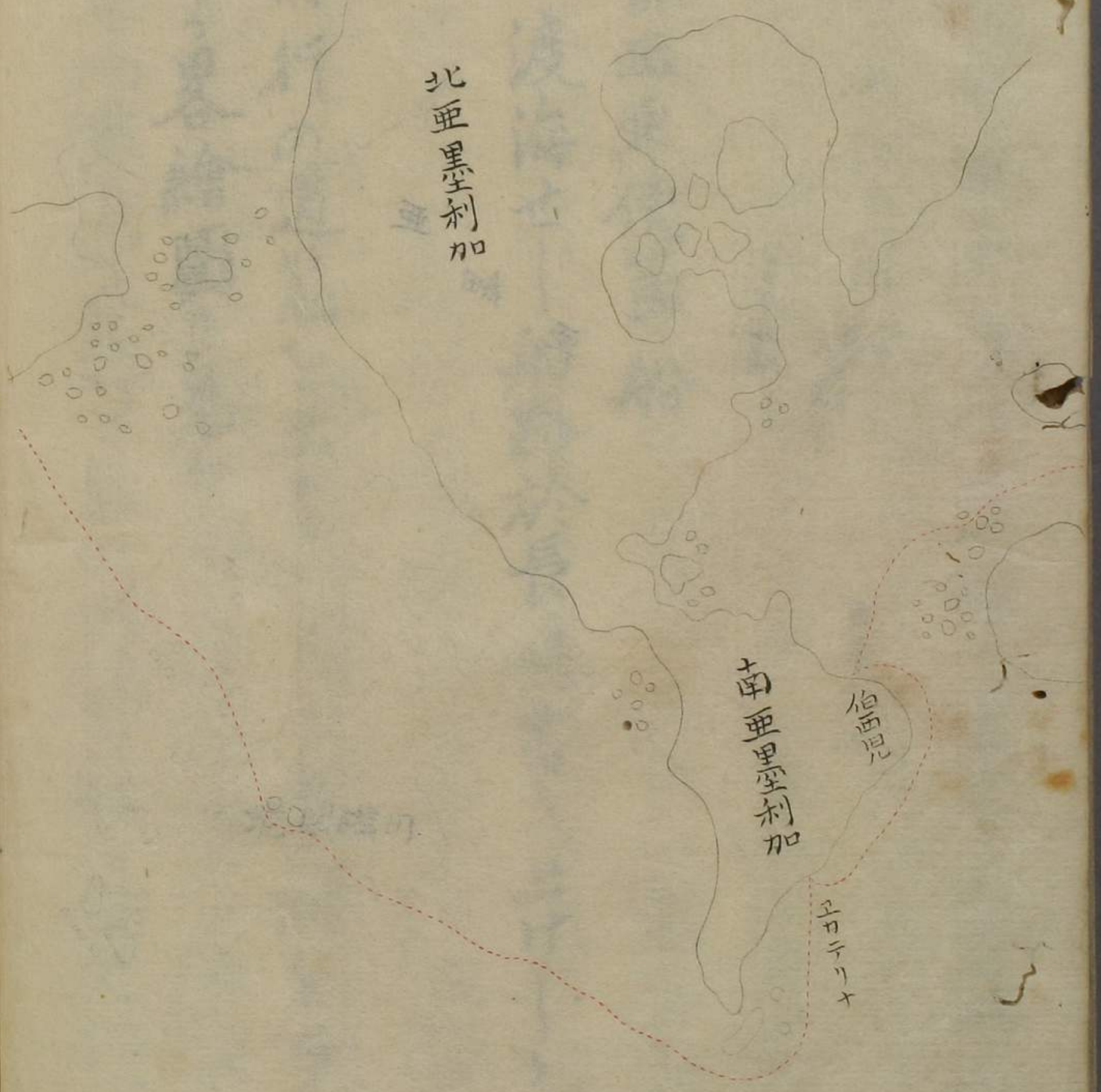


北亞墨利加

南亞墨利加

倫西

早西



按に地球を平面ニ図セルユヘ亜細亞「カムシカツト」

左右両方ニ出ルナリ「カムシカツト」ハ「カミシヤトツカ」ニメ和

蘭呼所ナリヤンクン譯官ノ書キ上ケユヘ如此書セルナルヘシ

ランタ コトバ 通辭役人

使節本願御取上げなきニの事ありて彼船乙

丑三月長崎より歸帆せり四人の漂客等々其月

十日を以て彼より我々御請取也ニ鎮チン臺タイ四

人の者と立山の衛エイ廳テイに引きて漂流より今度

衛役所

御奉行

歸朝キキウに至りし始末をサ査詢シエンせし後再三具ツツサニ

上チヨウ其事コト不ズ暫シバシバくコ筥コ免コ置コれ其後我ニ

公へ御尋問ミコトノトモシロの事あり此事済スて又トイハセ官府へ令コトを江ノ屋鋪

下シタし四人の者を長崎より迎へしトイハセ聞へし

こゝに於て其季秋平井窪田等の諸臣を御御頭平井林夫 御従目附窪田景宗

江戸を發し九州西肥セイヒに向はし先長崎崎鎮ナシより請取ナシて

東歸トウキし同冬十二月の末着府日ありしナシ

一日芝郎シヤロウ臺下ダイカに召され其事歴を問ナシえし先

征臣テイシ大槻オオキ志村シムラ弘強ヒロキヤウ

公命キミノミコトを奉ウケテし其事を與ヨシり尋問シロして其大略を

聞キせりシカシテ示後シカシテ又列位リツイの諸大夫相議シヨウギして

内命ウチノミコト二臣ニシは下り其始末シヨウマツの詳細シヨウサイを質問シツモンせし

ては於て其月コノコト为事を起ハナメし愛宕下別邸アイダゲノシタの一舎イサイ

に召コノコトして日々質問シツモン紀聞キブンを中屋鋪せし長屋鋪

洵コト經歷ケイリの次第シツブを逐オクつて問シロを起ハナメし弘強ヒロキヤウ傍ナリより

草記クサキを如此コトし長屋鋪る凡ナニ四十餘日是年コトを越スへて

春二月中旬ハルニツキノナカに及びセニ暇ヒマを賜タマりて本府ホンポより發ハツせし

この歸期キキに至キりて終ハツりトコ彼土カノチ往來オウライ滞トモ在ナリ十二月ニツキ箇



年の際々<sup>ト</sup>經歷せし事跡を聞書せし草按<sup>シテ</sup>成れり

一此紀聞愚<sup>ナシ</sup>隨無識<sup>ナシ</sup>の難民等彼魯西亜本地に介  
且歸帆せし海路の如きも徒らに妄見<sup>モウケン</sup>妄聞<sup>モウモン</sup>す  
る所ありて其詳審<sup>ヨウシン</sup>を得ず疎漏<sup>ソロウ</sup>あるもの  
多しこまじむを得ざる所なり其質其次<sup>ツイデ</sup>  
てを以て問を緊要<sup>キンヨウ</sup>なる事不起せし更に是を  
答ふに及まじ實に靴<sup>ツキ</sup>を隔<sup>ヘ</sup>て痒<sup>カキ</sup>を搔<sup>カ</sup>く  
如きもの毎<sup>コト</sup>より故<sup>コト</sup>唯其臆<sup>オウキ</sup>起<sup>キ</sup>して説話<sup>セツワ</sup>  
<sup>ハナス</sup>

せりまを雜録<sup>ザツロク</sup>せりありこれ  
公命<sup>キョウメイ</sup>を疎漫<sup>ソロマン</sup>ならずは似るなりといへるも方<sup>セシカタ</sup>  
なき所なり且其説く所解<sup>トク</sup>をへくして解<sup>トク</sup>  
かゝる又解<sup>トク</sup>するは似て殆ん<sup>オホシト</sup>と筆舌<sup>ヒツツ</sup>の逮<sup>チヨバ</sup>えざる  
ものあり故に一日門人某画事<sup>エガキ</sup>ふ意<sup>イ</sup>ある者を  
伴ひ至り其つゝ所<sup>トコロ</sup>を就<sup>ユ</sup>て傍<sup>カタヘ</sup>らる<sup>ル</sup>圖<sup>ツ</sup>狀<sup>ザウ</sup>をかき  
し免<sup>メ</sup>且<sup>カ</sup>問<sup>ト</sup>ひ且<sup>カ</sup>訂<sup>ト</sup>して遂<sup>ツ</sup>に數十圖<sup>カタク</sup>を成<sup>ナ</sup>せり  
是を以て毎條下に添<sup>ツ</sup>ひ粘<sup>ツ</sup>く其大要<sup>オホヨウ</sup>を得<sup>トク</sup>る  
似たり然れども是皆其真<sup>マコト</sup>形<sup>カタチ</sup>正<sup>ただ</sup>図<sup>ツ</sup>とあり難<sup>ガタ</sup>

固モトより唯其略を知る不足らるる人々も有る也  
又編中間々傳聞せらる所の諸圖を設け換へて  
以て補入す者ありこれ諸を象カタチ形カタチを以て時  
能其讀む人として亦其大約を理會せし先  
人事を欲してたり但其衣服圖等の如きも  
帶來の真物を寫真せし也

一 茂質他日草案を披ひて編集乃業を起さん  
弘強シタカキ筆記せらるるものも 茂質シヤクニシ紀聞キブンせらるるものも  
對校すコニサツ小前後錯乱コニサツ冗長ナマナカク重複カサナリをホトシト殆んと

草を建難タテガタキきう如しこれ其質問の日次第を以て  
隨て問を起し隨て記するを要すとすも  
話ワタシをシラわられ事に觸れ他に移りしり多かりし  
を遺忘を恐れ上下縦横シウキウをかきまぜし故也  
今弊免て彼と此とを前後錯置シヤウチし敏系シヤキをシカたり  
遺ウシを補ひ草稿ソウカウを事再三シバシバ及び紀行白  
曆を正し淹留エンリウ中間見せしこと事共シヤクニ假り小  
門を立て類ルイを分ち漸シヤクニくよして日を重複シヤクニ月を累  
々朝アサに校し夜ヨに正し終シヤクニに編次をシヤクニあせしり尤

のくく然れども取りてこれを讀みまゝ、行文  
重複の過失所かゝる幸に恕したまはらんを  
希ふのみ

一天明甲寅此年伊勢國白子の舟子大黒屋光太夫  
あるもの、彼魯西亞國の属嶋「アマミチャーツカ」と云  
所は漂着し  
仙臺の漂民到り「カニデレ  
イツシ」の近嶋ありて蝦夷近  
帝都に至り原路を取りて我蝦夷地を經く  
寛政壬子の年松前より歸朝す是我國の人歐羅巴  
洲に至り歸朝せし也  
此者等漂流の始末を記せる聞書世は流布する

この有り 茂質 其略聞を得て藏する物とありて  
稍其地畧を知れり且近日亦一友人の宅に在り  
たましく光太夫は邂逅する一函會新の聞く  
所のもの有り 故は旧聞新聞と合せて本編を  
校するもの有り 本編中光太夫曰又大光説と謗  
記するものなきあり

又茂質素業 和蘭の醫藉翻譯は從事する  
年有りよるして其書を涉獵するの際傍ら彼  
著撰中坤輿の図説を参考する有り

水々々地理方位を知らざる有り又門人某ある者萬國地理を辨するの學に志篤く新詳の著書頗多しスコラ茂實毎に校讐して其一理を與りカウミウ聞るあり是等を以て漂客の説く所の其已耳目は觸る物と相合するやあはれ故又或は彼誤りとあるへき所を正すは足るものも亦なきふしもあはれ依て其證とすナウセツボウ詰書シヨ讀人の使セツりありしんナとすナ其事ふしうナ彼説話ナ

の之にてハボウヨウ茫洋トラスとして解さくくナ多し其

一因ナ小曰此大地世界ハ自ら四大洲ナ分ちたるもの人遠西の人コウカイ四方ナ航海ナして此理を究るナとそ唐山ナより明朝の末ナいたり西洋人内地ナ入りて其圖説を示し人始て知れりナと見ゆ其四大洲ナハ一曰「アジア」明人ナ亞細亞ナ又亞森亞ナと音譯す

此大洲ナは係るものハ西ハアラビヤ蠟皮亞ナ百尔西亞ナ此方ナハハルシヤ應帝亞ナ此方ナハ天竺

東ハ支那これハ中国ヨリ 唐唐山ナリ 鞏唐山ノ北ノ大國ナリ今ノ清朝ノ 鞏鞏地ノ邊ハ唐ニ屬ス

北ハ止白里あると稱す 所す 魯西亜領地とあるは是を魯西亜鞏朝と云也

朝鮮 我 日本 琉球 蝦夷 等ナリ 此諸州其内に収む 女直

屬嶋呂宋 阿瑪港 咬啣巴 臺灣等影

二に曰「アフリカ」 明人亜弗利加又利未亜音譯

此大洲ニ係るものハ 厄入多 巴尔巴里亞

亞畏心域 工鄂 喜望峯 等の諸国あり

屬島福嶋 麻太 斯加 爾等ナリ

三に曰「エウロツパ」 明人歐羅巴音譯 大洲ノ東ノ國ハ

此大洲ニ係るものハ 入尔瑪泥亜 檳榔

法蘭得亜 又和蘭 暹蘭 荷蘭 椰郎察

意太里亞 伊斯把你亞 波爾杜尾尔

魯西亜 一名 没斯哥未亞 第那瑪尔加

漢父利亞 諸厄利亞も是ハ 等の諸国あり

四に曰「アメリカ」 明人亜墨利加音譯 此洲南北二大洲

此大洲ニ係り南洲に在るものハ 伯西兒

智加等の數国あり北洲ニ係るものハ

墨是可 メキシコ 新拂郎察 ノイハッランス 加里伏里泥亜 カルホルニア

等の諸国あり 南北共ニ属寫影一此洲南北共に  
百年以前より歐羅巴洲より開きたる土地なり

此四大洲の圖説明の未漢字に譯せる輿地全図なり

つゝものあり又職方外記あるところ 訳説の書

中にも載せたり又和蘭船 オランダ船

本邦に齋一 モクラン 来り天地球并大地総界図の類諸

家不藏さるる物多し 官庫ハ大小天地球并  
地球図説尤多し云々

又近來せし流布する新製地球及世界圖も皆

此四大洲を分てつゝもの多し是此度の漂流人初

より彼二天洲 マシア  
ユロツパ の海陸を過き歸路ハ全く也

大洲迄を經歷せり實小大地世界數萬里外四面の

環海を一周して歸朝せらるるあり マリアナ 預免此世界ハ

昔より四大洲に分てるを知る者斯編を讀むの先

勢こそさるる所かれハ茲不附記なり

一此漂流の紀聞ハ我 国の人魯西亜國に至り又其

国よりそるる者護送を得て歸朝せし者されハ

預免先以彼国のみを知りて是をよまざる者ハ

茫洋として曉りかこし此魯西亜國ハ本トよ

マリアナ

不歐羅巴洲に属せるの地なり。古今彼我の諸説  
を考ふるに我國にて用ロシヤとつる名ハ近き安永天  
明の頃よりして地ハ何れの方角とつるを辨へず  
共人々口はさるるあり。是ハ百廿十年も百年も以  
前よりハ「ムスコヒヤ」のり。ハ「ムスコヒヤ」ハ白石公羽九事略  
に日本を去るる一萬四千二百餘里程とあり。明の末に、  
これを真耶  
哥未亜と音訳せ職方外記并白石先生采覽異言に略説あり近來茂實  
の呈して御藏とあり。増譯重訂永意は詳説あり参考して其の  
詳あるを  
知るべし此国皮草ヒカクに名あり。蛮船マンセン此土産を我國に齎し  
来り其産を以て賈人草カクの名とす故に世に草の種

類中着胸乱のんじん小人とす。やあまかハと呼へる中

又むすこびやと称するあり。即「ムスコヒヤ」も草品の一  
名あり。地名たるハ、新者あり此列國に

惣州の本名「リュシヤ」又「カロシ」又「カロシ」スコイとも云  
明人魯西亜音訳此国右より歐羅巴洲の西北にあり

王国あり百有餘年来彼土に賢主其ある人興りて諸  
邦を懐け服従せしむ其東北方亞細亞洲止白里  
支那支那韃靼韃靼の諸大国共道と併せ其地「カミシヤ」ツカ「不至

追従へて近時我東北蝦夷諸嶋にも其人来往に  
享保元文の頃よりや松前地方の人彼等指  
して赤蝦夷赤人と呼へり是ハ彼人の中緋羅紗  
程々緋の類れ着服せる者多きをを見てみるあり  
いひ初めしるる也

これに聞傳へし兒女子ハ赤蝦夷と云ふ  
処よりしてハ恐ろしき鬼人にてありや  
と思ひしる人是ハ蝦夷ハもと人類の外なる物極おも心得  
るハ其奥の地よりして赤人赤忍を住まると聞てハ彼地獄の画  
を見し赤鬼あると云ふ物の物  
思れ怪しむもなりとあり 然るに漸々此人魯西亜人たる  
るを傳へ知り是をカロシヤと轉訛し唱へ又カロシヤ  
と何と云ふ呼るるなりしハ三十有餘年以前後の事

あると云ふ其本国ハ一カ有餘里外の地ありし不  
今亞細亜の尺境不至る迄本領とあり東北蝦夷の  
奥なるる寫々追梢略し併せ有川ものもあれハ  
知らん識らぬ遂に近隣の国となり我境界より  
海上十日をも経以して至るへき近地とあれりそ  
扱此度の漂流人寂初至りしハこれ等の所よりハ  
程隔り多る僻遠の地なれども彼属嶋となりしハ  
へ着せしかまはし我歸国の縁も出来たりし  
尤あくハ心かてり其僻島より歸朝のるも有る不幸



中の一幸にして其領所となりし地不至る彼亞細亞  
本領の内地へ連渡らむ圖らばも漸々歐羅巴あり  
王都も至り其領内の直徑ハ見尽し幸の使宣  
ありく使節も時節小過ひ如此四大洲を  
環海し不思儀にして本土へ歸朝せし也世の  
地理志しありて外域の事をも知り得んと思  
ふ輩も徒ら小因説を見て因縁を遥察する  
追なり然るを我郷の人とすらばも親く其想洲  
を親視目睹し来りて我彼を詳知の幸あり

子シゴロニニキタ

こつふへきうこまを煩を厭を次詳小因ひ精く  
質して紀聞し置るは肝要のるはるへきん  
と茂質等我  
國恩を辱し公命の旨趣あるを察し  
鄭重に窮詰する所以あり  
我方の人多くハ唐朝鮮天竺ありし名もの  
聞あり其ありする所は放てハ間或碩盧子  
宿儒も之をも辨するを得は海外四邊  
別は許多の諸大洲国土ありて列居する

をを知らざるを聞ゆ凡常の人ハ固より忙  
然として是を省みる也深く心あらん人々  
異域外邦とくも敷力て其国情俗尚をバ  
辨知せんを請し置きまざるに常に海外  
諸国の方位土風地形の廣狭肥瘠地海道里  
の遠近氣候の寒温物産の怪異人類の多寡  
厚薄政教の邪正各土の治乱興亡預免知て  
不慮をまじく六万全の謀りやせんへき心あり  
有て今あきりあるも今ありて古は冬

あきりあるもあり今を以て古を論まへん古  
を以て今を語へんは是戒

邦五穀豊饒五金富厚物力の充足十全あり  
り他を顧み不及ざるに因せざるへん然れ共  
常は心して覺悟あるべきものもや此是編に  
與らざる不似て大關係あるもの思へん  
なりよ贅言する也

一 此度漂客等魯西亜都府印行する所の世界図

方図はあせりの四枚  
円球の図面一枚を持来し

御覽を経て召上げらる。茂實編集の参考とせらる。  
一として癸下せらる。因てこれを閲する。地形度  
格ハ略知すへし。其諸洲各土の地名を記  
する所に至りてハ彼邦異字殊言ハ横行の文  
かまじとも讀て是を解さへし。以て永く  
公府ニ藏せらる。亦然らん。社中好事の書生嘗  
て彼大光の書記せる。彼国の字体配韻を略傳せり  
る者あり。これ亦茂實が門下ニ屬せる者あり。此書  
生をして彼地名等を讀し。先原圖四幅の横寫に

一圖中へ我國字を以て盡く譯記せし。先即是を

原圖ニ添へてし。

地球の圖と亦同し。詳記して奉る也。

取て是を二覽

せを先ッ。滿世界ハ自ら四大洲に分てる所を辨  
識し。又今度の漂客其四大洲を遍歴せし。道程をも  
分明を得へし。且是左右ニ備へて常に海外諸国の  
方位遠近を知らせあるの助けあり。一國藉ある  
所へし。

一本船日本渡海の海路右の世界の圖中ハ別ニ赤線と  
引き日曆を記せり。これ彼船中下案針役の某

ある者長崎在留中漂客等より為し記して贈り所  
なりといふ右の増図中より尤併せ写して奉送時不  
丙寅の秋 堅田侯此原圖全幅を我 公より借らせ  
のし浅草なる司天臺曆局間重富より示し重富  
是を圖し其海路日曆を精思熟考し遂に記定  
せり別は総界全圖を製し其格内亦右の海路  
日曆を記記詳解し其考定の織憲明備なり  
其經過の道程始て了然あり校成て即是を  
侯小進呈すといふ他日 侯原圖を還し其曆局

新製衣考定海路全圖を併せて我  
公に贈らば 公一覽 茂實の命しこれを模寫せ  
しむ猶復頗る再校せり 功竣て又是を初免  
譯して寫したる圖四幅に添て奉呈し共に五幅  
とあれり此考定新製衣圖ハ我軍為人と欲て為  
すべくはるわたり實小本編を讀むの間照し  
合せて其道里經廻の次第を明白とするの益少あ  
かゝるもの也  
一 茂實重富と交終年あり 近頃右新製衣圖原稿と

以て茂實モクシ示す茂實幸ひ小これを得て己申子の  
の「イキリス」出帆後の海上紀聞と校合し因て亦發  
揮せし所ありあかしくしてまん其明語を得あり  
殊に其船を寄せし湊々の名漢ハン又利無リを「ハムト」と  
いふ大港なり加那利カナリ無リハ「テ子」リリビビ亞墨利加の伯西兒フラスハリ  
ンガナリンニ夫より「カニルケ」イイス「サントウ」イイククト等なり即その諸  
考を取て本編毎條下ニ附記せし海路記曰ク即  
是なり

崎鎮肥田豊州藏しあり魯西亜本領全圖一幅あり

これ亦本國印板のものにして甲子の秋本船呈し  
るもの云豊州これを和蘭譯司命し記せし  
先其模圖地名号国字をとりて記せしもの成まり  
政府の後原本と模寫との両圖を併せて堅田彦  
の見覧不備な彦これを見し後轉借して我  
公不贈る公見亦是を請借して茂實モクシに属せし  
質問の料と分るる且騰寫して紀聞編集の  
一考不備なるを命せし是丙寅初春にあり茂實  
請て是を檢閲せし本領新舊諸州の明細を

盡くある物と見ゆ 仙臺船最初漂着せる所  
デレイツケ等の名、舊版地図に見る所なり 此図を  
見れば其諸嶋所在分明なり 宜なり 近年本国より  
開招したる地すれは也 其以前、舟船絶へて至ら  
ざるの僻遠の一幽島と見たり 但是其散在の諸島  
中漂客等臆記し来れる名を見れば然れども  
先大夫漂着せし「アミヤッカ」の名見ゆれば此嶋散在  
の諸島中たる事必せり 一日これを漂客等不示して  
問ひ糾きよむるに 図せる諸嶋中たる事疑ひあり

其名の如き、舊名を記せるものなり 是尤  
本編参考の一となるべきものなり 原図に舎て長  
崎人の記せる図幅を謄寫し  
公命に應ず  
亦後亦堅田彦全幅を以て曆局間氏不示る間主  
是を熟視し 蓋以<sup>イユミ</sup>て爲く崎人の記疑ふ所多し  
嘗て先大夫の彼国字を傳へて熟せる者たる事を  
聞き 一日彼を召て地名を記せる魯西亜文字を讀  
み 免て新く改譯せるもの成さるゝ事不於

原圖に就て全圖を模寫し度格を設きて各  
ち小国字をとりて譯語を施し圖中都府縣邑  
の記號たるふ至るまで精細これを考定して  
譯例一冊并に圖面里程度尺等録して  
彦に附呈す依て彼詳説の精阻始て判然たり  
他日又是を戒公に示さる頃茂實は命せられ復  
別は首を模寫せしむ茂實就て是を熟読するふ  
前譯多く和蘭呼ぶ所諸国地名を以て各土に施  
すとの見えたりこれ等の土地は於て大に左界は

こいふへいといふも魯西亞の稱呼と大に異なり  
是とせし訳司魯西亞の文を考ふるふ因て其家  
へし層局改詳するもの、右ふといふ如くこれを  
地名、国より都邑取衣落等の記号ふ至る近其附  
説に詳解せり且なり前譯に比され其様大に  
小勝もといふを嗚呼同氏の功績ありといふを  
人々此圖を見て彼国近時益地は雙ひなき  
一大巨邦たるを知る又近頃我國界は接近  
せらるるを見ざるへし氣て本編を讀むの日

是を以て其詳審を得べきもの也。曆局改  
譯の物を以て正本となす。凡へきなり。茂實、問方、訳例  
中説く所を就て増訂する所あり。其末に附  
せり。

一 或人、魯西亜新都「トルフルカ」の図を藏するものあり。是  
往年大光將來せるものなり。借つて以て謄寫し  
て奉呈す。國中、符號あり。かならず其附説あり  
て其詳を得べきもの也。他日これを得て附呈せん  
れば、是亦漂客都府の説話と併せ見、頗る其

概を察するに足るべき物なり。

一本、編實政癸丑の冬、出帆、雜風、吹流され、異嶋に  
漂着せし。小始り、夫より魯西亜国本地に入り、  
コックシと云ふ所を、数年滞在せる。諸説話の中、  
この所、滞在久しきを以て見覺へ、聞習ひ、其繁  
けを、縦に其類を、分ち門をたて、以て紀聞、教篇  
をなせり。夫より、ここを、發し、都へ入り、歸朝、海路  
數月、文化元年甲子の秋、我長崎に至り、  
の記行を終りて、前後十四卷を、おぼし、右門類中



分ち合せかゝるも、雑事をあつめて未編とあし  
通計拾五の巻とせり、これを以て拾五年来の  
略聞紀事終まつ

一 難民固より野陋無識の舟子あま、数年彼地  
在りとも、年月の聞見は心ある、且彼人固より  
彼等を貴客を以て待たぬものもあらず、れは生命  
を以てあへき、程相應の憐愍撫育は有あらず  
八十年の間、奴隷の如く役せしめられし見ゆ  
これハ尤もあへき、然れハ中等より以上のもの、疎

漏あらんまゝ、たまに見聞するも如きも無識無  
雅なり、能く其事情を尽せしめざるや、故に此記  
聞を讀て全く彼国俗事態を尽せしめしめへか  
ら、又あらず、録せしものかな、は彼等、皆見違  
ひ聞誤るる多かるべし、或、性質等、聞誤りも  
有へく、又質聞、不遺漏するものも、ゆあるは、  
これたゞ、彼土の一端を見るなり

一 前條より、如く本編毎事全備せしめるの雜録  
あれども、毎條下にも附説するも、如く今度の漂流

歸朝のり、古今未曾有のり也。其中南北極下の  
近き氷海に至り其北極下に近き海まで、既に  
日のありき海水の氷り堅りたる氷山より、その  
見又南極に近き六十度前後の海に近至りてハ  
己に又氷海に入らんす其南北兩極相距るる甚  
遠き極下は近分たる如此所へ一度あり、西回近  
至りしもの不思議を始として又夫は反對せし  
赤道直下酷熱の海に南へ距ると西へ距るとの  
所を再び逆經過し、極東の穴居羽衣より土室氷

窓の奇々怪々なる其淹留の地の屋宇必き少温を  
用ひ雪中の行旅面を覆ひ手足をばく、常は皮  
裘を着て寒小堪へば動もさされ、手足寒凍し  
脱落する程の嚴寒、冬多く夏少きの地に住し  
又或は赤身裸體日夜河海に浴して、水に暑を避  
るると、程の冬熱夏有て冬なきの国も至り  
諸國の人類、二十餘種、容貌言語も異なる者も  
も會合せし、中小人、黑人、長人コルケイ、ササキ等の  
長大文身の人の類、吾人  
和漢諸書、稗官小説の類も載せ其図の、聞見

せし異人を親視應接し又彼北邊より犬を  
使ふる馬のこくふ雪車を牽くもの奇術又  
音にのみ聞へし空中を走りす気船を二見し或は  
海獣の異品を見貂を見駝を見象を見鱷を見  
飲食に生ける牛の乳汁を飲み又生ある椰子  
を食ひし等異食異味を嘗るるの類事々物々  
として奇ありし事なき耳を飛し目を長  
くするの新話珍談共あり地は北亞墨利加洲の属  
嶋に始り亞細亞洲歐羅巴洲亞弗利加洲南亞墨利加

の五大洲方を遍歴して地球の四面環海一周し驚  
濤九万里を凌ぎ再ひ我東方に歸朝せし前代  
未聞の一大奇事ふして上下古今評判三千年  
来絶て無き所の奇話異聞なり  
命を受て此編環海異聞と題せしものなり故  
なり

一我國四方の海を受し国ある沿海の舟客動も  
それ外域異嶋に漂到する者多く唐船或は  
洋船の護送を得て歸朝せし其異事珍説を

紀聞せる物世ふ多く然きもこれハ多ク亜細亞  
洲方一洲中の一屬地あり近きハ唐山安南遠きハ  
支那南海印度諸嶋等ハ漂着せるの類此所を  
去て僅ハ數百里の外ハ出ざる近傍の異國なり  
至れるのミナリ今度漂流の往來北より西より  
南又西又北數千万里の外よりして遂ハ我國ハ  
東歸する道程海路の奇話異聞尋常漂流記  
日と同くして語らんや

一前もこの如く毎條諸説の内且て茂實等

他の視聽する所ハ相府さるかと思ひしハ傍ハ  
愚按評説を加へて本條を明さんとして即其  
條下ハ附記したる故ハさるハ贅せき然れも  
これ又的當なるや否をさる

一毎編毎條附記愚按の諸説重複鄙重なり  
さるハ再校セハ亦達後を恐る固より漂客一時  
口説の雜記なきハ意の達せるを重とせしハ加  
るハ茂實の驚劣にして不文なる職にして是  
仍るなり但是編終

内命の重き恐懼の至り、堪へざる所なり

一編中事両様、録せる物多し、漢土のものを支那

と註し、コトタイツと云ひ、唐山漢地と書し、コトシヤ

と云ロシヤ、又コロシイスコイ、又魯西亜と云ふ音譯字を用

ひ、又通稱、從てコロシヤと記し、阿蘭陀國を和蘭

共書し、又此餘諸國地名等字を用ひ、假名を用ひ

多るの類あり、其中の文字書違たるも、數多有

る、前後を照し、讀て幸に怒らぬものを

希し、所あり

一蛮諸國字片假名を以て、其音を換ふもの、二字合

字を用ふものあり、こま一字を以て、其音脇和

かたまら、故なり、たろ、ハ、コ、ウ、イ、カ、イ、直の類、れなり

二字をよまれ、自ら其音出さる如し、但、髣佛の間

とふあるものなり、ハ、引、呼、なり、コ、シ、コ、シ、と記

せらるるあり、これ、コ、ウ、シ、コ、シ、の、コ、シ、と混さるる故也

コ、シ、を右側、ハ、小書する、コ、シ、カ、シ、等、ハ、促、呼、するもの、ハ

又、半濁音ハ字の右頭、ハ、是を記し、コ、シ、の如し

濁音ハ、ハ、を用ひ、其外、蛮語を假字ハ、書するもの

大抵「」の勾畫を設くられ、下の文不混同  
せしめんとせんう為なり

一本編中羅旬語云々と録するものあり、四羅旬、西洋  
言語の由て記する所あり、此古言今に於て  
政羅巴洲中諸国通用するもの、併此語不  
記せる書、與子者、あれ、解、か、く、と、し、但  
名物の称記等、総州通称、年久しき故一言一  
語、知るもの有と云、聲言ハ、司、ク、ト、シ、赫、羅、旬、語、註  
せる類、なり、

一魯西亞国字統計三十三字、横行左讀、これを

「オ、シ、イ、ス、コ、イ、ア、ツ、ブ、キ、」と、し、し、し、我、方、の、ろ、は、と、し、し、し、如、し、  
和蘭字、は、似、て、字、体、音、声、大、に、異、つ、且、其、数、も、多、し、  
漂客西人の内一人も習ひ得たる者なり、故に言語  
の類も耳に聞て、目にはあつゝ、るゝる、を、聞、違、へ、多、  
か、く、し、し、し、思、ふ、と、し、し、ベ、ト、ル、ブ、ル、カ、と、し、セル、ボ、ル、カ、ヘ、ト、ル、ガ、キ、と、し、し、  
「ハ、ラ、ウ、ツ、ケ、ガ、ジ、ミ、」と、し、し、聞、違、へ、類、へ、光、太、夫、ハ、既、に、文、字、を、も、  
習、ひ、受、け、来、り、し、故、彼、言、語、も、字、よ、り、書、き、聞、え、  
し、し、し、見、ゆ、ま、し、其、億、記、せ、る、もの、万、分、の、一、と、し、し、

とも大ひある誤りなきものとすや本編に類中  
 文字學子藝言學子等の門なきは彼等其事を  
 習ひ来らざる故なり彼國に書學子文學子の  
 諸科種々あるものと聞ゆ嘗て先大夫傳來  
 りし文字楷草ともいふべき二体寫し置るる  
 ものを尤も寫して博物の一は供と右より  
 彼印板世界圖等以此文にて記せらるる我國  
 字を換て譯せしむる模寫圖のたゞし

魯西垂國字

魯西垂國字

ア	ベ	ウ	ガ	テ	キ	セ	ニ
Α	Β	Β	Γ	Λ	Ε	Ζ	Θ
Ι	Ι	Κ	Λ	Μ	Π	Ο	Η
Ρ	Σ	Τ	Υ	Φ	Χ	Ψ	Ω
Ϡ	ϣ	ϥ	ϧ	ϩ	ϫ	ϛ	Ϟ
Ϡ	ϣ	ϥ	ϧ	ϩ	ϫ	ϛ	Ϟ

按り又作  
 Ϡ又作  
 ϣ又作

又一体

<sup>ア</sup> <sup>ベ</sup> <sup>ウ</sup> <sup>カ</sup> <sup>ケ</sup>  
 Ae P J O L I r ll 28  
<sup>エ</sup> <sup>セ</sup> <sup>ツ</sup> <sup>イ</sup> <sup>イ</sup>  
 Ee H @ 3 p i t H ee  
<sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup>  
 Ku h l i k a Ma to re  
<sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup>  
 Pe Cu Jim Ye 3 0 2 x.  
<sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup>  
 3 3 Ye 3 3 3 3 3 3  
<sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup>  
 G 3 3 3 3 3 3 3  
 3

以上ノ二体共小三十二字ナリ但其行草小似たる体ハ其内小異体多ク右の如ク

一和蘭の書小曰く魯西亞の文字ハ其始ハ斯刺勿

泥亜 厄勒祭亜との二国の文字より出たる物あり

と云ふ斯刺勿泥亜も古へ魯西亞の始祖出生せし

國あり厄斯祭亜の教ハ昔より今に至る迄魯西

亜人尊崇する所のものあり

按ニ A Γ Λ E I K Λ И O П P I Φ の十三字

又 (ア) (イ) (ウ) (エ) (オ) (カ) (キ) (ク) (ケ) (コ) (サ) (シ) (ス) の具體ニハ厄勒祭亜小同ナリ



又凶毛<sup>シキ</sup>之<sup>ヒ</sup>の四字あり其用を詳<sup>ヒ</sup>せし其  
楷書不似<sup>ル</sup>ある体亦詳<sup>ク</sup>あり魯西亜刊刻の  
書地圖の内も此等の字あるとの未だ見<sup>レ</sup>て  
右の四字の内<sup>ニ</sup>ハ別<sup>ニ</sup>ち厄勒<sup>ル</sup>祭<sup>ル</sup>亜<sup>ル</sup>の<sup>ニ</sup>ハ字  
あり<sup>ハ</sup>然<sup>ル</sup>時<sup>ハ</sup>此等の字<sup>ハ</sup>亦魯西亜<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>と雖  
も其<sup>レ</sup>用<sup>ハ</sup>諸<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>ル</sup>事<sup>ハ</sup>亦<sup>ハ</sup>因<sup>テ</sup>異<sup>ス</sup>者<sup>アリ</sup>へ

和蘭ノ書ニ魯西亜所用九四十三字ナリト云<sup>フ</sup>一見  
ハ<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>外<sup>ニ</sup>猶<sup>モ</sup>尋<sup>常</sup>ニ用<sup>ユ</sup>ル<sup>ハ</sup>ハ<sup>レ</sup>カ<sup>ル</sup>モ<sup>ト</sup>尚<sup>モ</sup>数字<sup>有</sup>ヘシ

本編乙丑の年抄問<sup>ハ</sup>え<sup>テ</sup>丙寅二月の中旬<sup>ハ</sup>終<sup>ル</sup>

二臣退<sup>テ</sup>弘強其月より編集の草<sup>ヲ</sup>起<sup>シ</sup>茂質<sup>隨</sup>て

再校増訂<sup>シ</sup>其秋<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>弘強<sup>ニ</sup>祇<sup>ニ</sup>役<sup>ノ</sup>任<sup>果</sup>る

本府<sup>ニ</sup>歸<sup>ル</sup>稿<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>茂質<sup>ニ</sup>屬<sup>ス</sup>茂質<sup>亦</sup>別<sup>ニ</sup>紀

聞<sup>カ</sup>る<sup>ル</sup>雜記數編あり官<sup>整</sup>と素業<sup>ノ</sup>の餘<sup>間</sup>

彼<sup>ト</sup>是<sup>ト</sup>を<sup>ハ</sup>比較<sup>シ</sup>前後<sup>ニ</sup>轉<sup>位</sup>錯<sup>置</sup>して<sup>ハ</sup>次序

を立<sup>テ</sup>附<sup>記</sup>参<sup>考</sup>勘<sup>定</sup>する日<sup>ヲ</sup>を積<sup>テ</sup>又<sup>ハ</sup>新<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>物品

諸<sup>圖</sup>を作<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>或<sup>ハ</sup>地圖<sup>ノ</sup>數幅<sup>ヲ</sup>を譯<sup>セ</sup>る

むらの會議<sup>往</sup>復<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>繁<sup>キ</sup>ふ<sup>ル</sup>月<sup>ヲ</sup>を累<sup>ニ</sup>収<sup>メ</sup>る

如是<sup>ニ</sup>編<sup>終</sup>の<sup>ニ</sup>業<sup>ヲ</sup>怠<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>如<sup>ク</sup>も<sup>ハ</sup>未<sup>ダ</sup>也

とと 茂實、才浅く筆短く、ついで一年を超て  
此年の初夏不至りて稿を脱するのをあせり  
煮愚の小臣、忝くもその選不遇ひ奉り  
命を合んて絶域九万里の地、海形晴風俗事  
態、数々の奇説珍語、居恒きくをりて  
とんと欲して致さく、くも縦又同じ  
坐し、聞し、の恐れ多くも有か、くも昇  
平の御世は、遇ひ奉り、張三季四、をり  
き、微臣も、今、始免ぬ恩澤の波及せるふ  
出たる限り、かき、幸あ、くも唯遷延、遅緩の罪  
逃るべから、全編呈上、の日、左右の近侍、よき  
と、りや、を、あ、くも、を、希ふ、の、

文化四年丁卯 初夏

醫臣 大槻茂實 謹識

彼国のる本編、不雜載、くも、さる、の、前、  
窮詰せし、数件あり、亦臣嘗て、聞見、置  
たる、の、共、か、くも、相合、さる、諸説を採録、

數十条別卷一冊となすはこれ編の探事  
あり、敢て 公家の秘笈たるを  
欲し己丙寅舞馬の尻後三伏の日袂墜の  
假宅消夏の間雜録して其秋左右の侍臣  
某等より奉るるをぬ是恐るるも

質問編集の

命を蒙るる寸衷の微志なり

目次 柳會の... 舟中... 遊...

卷之一

寛政五年癸丑石巻出帆後雜風より八月

漂流し甲寅六月「ナニツケ」より「嶋」は漂

着し「ナニツカ」といふ湊より一年又向ん

滞留せし記

三圖

卷之二

「ナニツカ」滞留中の記并魯西亜船の護送を

得て乙卯四月此湊を發し其本領乃内  
地ヲホーツカレと云湊ニ着岸し數日逗留  
其八月より翌丙辰の年迄十五人の者も  
追々ニテ度々「カホーツカレ」出立「ヤコーツカレ」と云  
所不到るまじくの道中記 拾五回

卷之三

「ヤコーツカレ」ニ着暫く滞留夫より「イルコーツカレ」迄  
送り届られ惣人数追々丙寅十二月同所不  
目相會せしまじくの道中記并此所ニ數年

卷之四

足をとくもくもくふかきたる記  
八ヶ年滞留記事分類

街衢居室

第一 七回

卷之五

飲食

第二

服飾

第三 廿回

卷之六

寺觀道教

第四

産育及赤子命名

第五

六回

管

第六

卷之六

葬

第七

祭

第八

衙廳并官名職掌政治兵卒武備

第九

刑獄

第十

錢貨

第十一

卷之七

卷 尺度并里程

第十二

秤量

第十三

樂器

第十四

氣令

第十五

耕農

第十六

交易

第十七

醫療

第十八

物產

第十九

數量

第二十

土俗風習

第二十一

卷之八

言辭

第二十一

天文

地理

諸国地名  
本国通称

時令

人倫

身體

居室

動物

器賤

衣服織段

飲食

言辭

各門譯語并名物ノ解其下譯セリ

卷之九

第二十二

癸亥の年三月王命下りて十三人の者「イルコー  
ツカ」出立七千里の道中へ首途「舊都」ムスクウ  
を経て新都府「トルケルカ」へ到り「道中」の  
記并旅館滞留中の記 是享和三年

卷之十

国王「目見」以来の次第并 都下巡覽の記

卷之十一

都府滞留中の記

此所より發 儀平等四人の者日本使節船  
同伴歸朝せしむ昔中渡され出立して「カ  
スダ」の港より大船に乗組まての記九回

卷之十二

六月十六日「カスダ」出帆 那馬ルカ  
諸厄利  
亞へ舟を泊め加那里亞島へ船を寄せ夫より  
赤道直下の海上を經過し南亞墨利加洲  
伯西  
兜の舟「エカテリ」湊へ着岸の海路及同所滞留

出帆して其大洲の岬を乗廻し西海に向ひて

の記 東南亞細亞の島の緯緯

卷之十三

甲子 文化元年 四月下旬「トルケイ」の裸嶋へ船を  
繫け此所を發して再び赤道直下を西に距  
里「カ」へツケ嶋を歴夫より北亞墨利加洲を右に  
して亞細亞洲より魯西亞領分の尽堺「カミシヤ」  
ツカシの湊へ七月初旬着岸の海路并同所  
数日逗留用意整ひ八月廿日出帆して蝦夷

地より日本の東南よりくる大洋を渡海し  
薩摩海へ向ひ九月初旬肥前長崎へ入津迄  
の記

卷之十四

長崎港入船上陸後の次第并乙丑二年三月  
御奉行所御請取迄の記

卷之十五

往来滞留前後の間の雜事

從寛政五年癸丑  
至文化三年丙寅  
十二年二月あり

出 統計十五卷 卷前序創目錄二卷共  
十二卷圖一百十有五

環海異聞卷之一

文化元年甲子九月魯西亜国使節大船長崎  
入津仙臺より一の漂客四人連渡り同二年乙丑  
閏八月四人の者從 公儀御引渡のり本藩へ  
被 仰渡平井林大夫 御武頭 窪田榮助 御後身附 等  
長崎へ被遣同所御奉行所より請取之同十  
二月江戸へ着り其紀聞之事大槻茂質 志心村  
弘強 命せ 係是 依 同月二十五日昼



後より問を起し翌丙寅正月迄

鋪明御長  
屋おいて

漂客共へ兼候聞書

愛宕山下  
御本屋

宮城郡寒風沢濱善五郎侍

水主

津大夫 丑三十一歳

桃生郡深谷室濱源三郎侍

同

儀兵衛 丑四十四歳

宮城郡寒風沢濱長九郎侍

同

左平 丑四十三歳

御奉行所

桃生郡深谷室濱

太十郎 丑三十九歳

六十郎 著岸江戸着石モ  
病氣ニ付 相尋候節 始終不能出候

拙者共魯西亞國所領之島に漂着仕夫より地

方へ被送り由魯西亞本國仕立之船より去年子の

九月長崎に着當丑の三月十日魯西亞人より

御奉行所に御請取御役所に被召出段々

御聞記の上踏繪等被仰付相濟此度江戸

御屋敷江到着先年御國許出船以来漂流  
 之次第遂に今度帰朝仕候始終イサ委曲之儀  
 御尋付付尤も申上候

一拙者共十三年以前寛政五年癸丑十一月二十七日  
 牡鹿郡石巻沖船頭平兵衛より被雇候用木  
 雜小間木四百本并御米二千三百三十二俵十月十日積入  
 江表江相廻り候積り同所米沢屋平之丞船  
 八百石積若宮九二十四反帆の船江積受

牡鹿郡石巻沖船頭

平兵衛

宮城郡寒風澤濱

舵

左大夫

同所

水主

銀三郎

同所

同

民之助

同郡石濱

同

辰藏

牡鹿郡石巻

同

清藏

同所

同

八三郎

同所

同

善六

同所

同

市五郎

同郡小竹濱

同

茂治平

同所

同郡石巻

同 吉郎治

炊 己之助

右十二人小拙者も四人都合拾六人乗組檣網五  
房蔘<sup>イナビ</sup>麻<sup>マ</sup>網三房草<sup>クサ</sup>網三房積込石巻御役人  
損より御送状等船頭請取之出帆仕候以来  
尤之通御坐候

一十月廿七日石巻湊出船風一向無御坐候舟東名  
浦へ致汐緊候

一同廿九日登り風不相成候間同所出船凡五十里程

沖岩城領塩屋崎迄走りし所申西南<sup>西南</sup>之風吹出  
度々船中へ波打込段々艦<sup>トモ</sup>を打越し程の荒

浪多相成中候

一同晦日西風不吹替り岩城領廣の前へ船か  
仕

一十二月朔日時化模様見へ故御国の方へ船相  
向け戻り走り仕八半時頃より地方一向不相見  
一同二日曉七時より北風不吹替り又以登り走り  
仕所又申西風不変り浪荒く相成舵を吹き

折しき船危く相成り舟乗組の者共髻を拂  
ひ佛神へ祈誓をかけ身命限り不相働い得共  
地方々向不相見え此邊塩屋崎の沖と覺え申  
一三日風前日の通り吹續き舟帆柱を伐捨申  
此節塩屋崎にかきつゝ見えし中々船寄  
せ兼申い

一四日風ハ同様にて致し方無御坐れ日まて追々御  
米も半分程削捨漂ひ居り此節地方の山一向  
相見え不申い是より以後大抵申西成南西之風北也

の方より吹  
来り風合へ

毎日吹い内就中申西の風多く東の方へ  
走り勝不覺申いて数日漂居申い

一翌三寅寛政  
六年正月六日七日頃又ハ大浪被揉立間  
残米の内半分程又々削捨表の方ハ網二房引  
せツカ冷水を操り相凌いのこして方角も不辨流き  
次第不致し罷在い

一同月十日申西大風吹艦をうち破られ通ひの口  
其以前ハ相破い同日ハ棚も裂れ故繩を以て引  
糸ちを懸け帆を解き巻肌を打込取舵の方

艦座の片艦を浪に被取の間乗組の者不残表の  
方より居中の船中貯の水も此節一字失ひ中にて  
此後ハ飲水も雨降の節溜置相用中

漂着の節迄飲水尽の節ハ何れも汐垢離を  
とり而をいのりハ多由ハ格別而のあり中  
やゝぬるハ無御坐

一同十二日十三日風ハ前の通り船ハ右のこゝく大破仕  
故裂け割まのえうりハ相成の付有合の綱等  
を以て縛りつけ中の船底ハ次第に海水溜り

の間皆く是を汲捨るりれは打掛り居中にて  
流き次第に仕ハ板益夜引切りも無御坐  
何れも殊の外疲ま中の付追々ハ番立を仕り  
代りくく出相凌き居中此已後

一同十四日風ハ是迄の通りにてやハ和らき  
相成り其後数日の間同様御坐

一二月五日申酉大風にて船表の方も打破り取舵の  
方表垣通迄浪に被取の間糧米二百俵程残  
置其餘ハ削捨中此以後も風ハ前の通りにて

漂ひ居やい

一 三月朔日申酉の大風下ヶ綱二房破二頭五尺板浪よそ〜れやい是よりハ次第ニ風和らきやい

一 同三日 蠟殼カキカラ附ハ丸木一本 長サニ丈程九サニ尺程も御座い 船の邊江流

き寄りの付 地方近付いやと力を得里敷を札

付り神圍を上ヶい所地方千五百里と神龜下り

やい

漂流中神圍を上けいり幾度とりも数志き

〜い地方 武千五百里より段々認りて調い所

千九百里とやきより以上下り不やい北〜り

ハ追々近く相成り七百里とや下りやい

一 同六日天氣も能ハ間航柄カキツカを帆柱より中の車立ニヤクン

結ハ付帆を歩懸け綱を引させ風よまかせ走り

数日の間漂ひ罷在い

一 同二十日頃辰己轉吹変りい得共多々ハ申酉戌

南西 風よて流まやい

一 同四月に入らても三月廿日以後の風合ニ大抵同

飲水ハやそり雨のせり天水をそり溜る置き

渴を凌ぎやい

一漂流以来此せらまて折々時雨降りやいて日本の  
冬のころ五月に入つても折々雪降る御坐い  
一兼々通船のせら定りたる船路より沖へ乗出  
し得者カゴゴとや鳥を見よる御坐い能  
く人よ馴せしもの御坐い漂流の間見當り  
いカゴゴの形も別て大きき常に見いよう三四  
倍も有く就鳥のころは様子たはるし  
御坐い此沖通り船の通ひるき所故何歎

見馴せぬもの水面は浮ひて有りと思ひ船

よて船の上を繞り舞ひて羽を動かす事せむ

しかゞぶぶらうくこや音して飛ひ廻りやい

変して人よ馴せしもの御坐い水も浮ひ

居やい

梅はカゴゴの漢名信天緑  
一名信天翁の一種あり

一海上地方は近き通り水色赤きかくなり

沖へ出ていへる水青くありて常に見あぬ

いろかきを魚類も見へるやい物て魚も

地方近き所なりて居るやい

一九月廿日曉方辰己棘大風雨よて走りやい

六日ひより何とせ地方へ乗り寄せや度又い

神亀をよい所地方二百里と神亀下り夫

より日々神亀をよい所追々地方近く相成

同八日よい五十里とやま神亀下りやい

一同十日朝曉<sup>モヤ</sup>而<sup>モヤ</sup>竭<sup>モヤ</sup>御坐い内乗船よりをらう向ふは船の

うきことの見はげやい能々見留るるへ至て小き

山<sup>ウツサ</sup>下り御坐い何とせ地方へも遠くはあま

か<sup>ウツサ</sup>と噂<sup>ウツサ</sup>仕<sup>ウツサ</sup>中朝五半頃<sup>モヤ</sup>膝<sup>モヤ</sup>氣晴まいて月の

前よりうき不意よ丑寅の方よ雪積りい高山を

近く見付やい是まで海上漂流の中ハ蝦夷松前

の方へ流されい事とをうり存居い所時あ<sup>モヤ</sup>雪積

りい山を見掛けい故是者日本の地をいれま<sup>モヤ</sup>い

異國<sup>モヤ</sup>からへしと始く存りやい此所へ二里才

も隔い様相見へ仙臺盤井郡の駒ヶ嶽程の

山と見受やい乗組の者とも何とせも悦ひ<sup>モヤ</sup>無

俄にも乗付か<sup>モヤ</sup>其山<sup>モヤ</sup>の卯辰<sup>モヤ</sup>棘<sup>モヤ</sup>の方<sup>モヤ</sup>岩根へ

船流を留りい所浪打際まで雪有て一体切り



岸ガニに巖石セキきりりたて甚峻ケバシキき、出崎の所まで中々登り可や体も無御坐の間本船、岸の邊岩間へ碇を下し、網三房下々此所へ乗り捨置端船をおろし、糧米三俵其外午廻りの品積み移し、船神フナタマを持ち十六人共、夕七時頃小濱ある所へ上陸仕、所日本の地と相見え、一鉢砂地にて近辺草木とてもなく、濱辺近雪有とい異国とも有へきやと存いへとも人家もなかり間尋廻り高みの所より最初碇を掛置本船の邊を見下し、此処本船、もとや波は亦碎くれ流まじ沈みいや不相見、いて二三尺の小板をうき見へや、此所又十日斗り逗留雪を踏こけく、人家を尋いへとも見出し、不中の故又神圍を上げ、いて嶋を圍う人里の有る無る方角、何れの方と三度まで強ウカシい所、此処人の住島にて成亥北西の方五十里又五十五里と神圍下り、間又端船をおろし、いて初る本船をうけ、山の出崎を廻り、地方は添ひ、奥の方へ二日程嶋の端くめ、乾の方を尋やん

の邊を見下し、此処本船、もとや波は亦碎くれ流まじ沈みいや不相見、いて二三尺の小板をうき見へや、此所又十日斗り逗留雪を踏こけく、人家を尋いへとも見出し、不中の故又神圍を上げ、いて嶋を圍う人里の有る無る方角、何れの方と三度まで強ウカシい所、此処人の住島にて成亥北西の方五十里又五十五里と神圍下り、間又端船をおろし、いて初る本船をうけ、山の出崎を廻り、地方は添ひ、奥の方へ二日程嶋の端くめ、乾の方を尋やん

六月廿日烟立の所見付の間人家と相察し其所  
を月當ふ尋ね承り船を近寄らば八人数三人程  
相見へやの間皆々慌ひ早速と上陸仕度存ひ其此  
邊揚り場不宣如何と見配り罷在の内向ふ出  
先きの処見出し其迎へ船を廻し参り見へハ  
其出先きを廻り砂濱ある所御坐の三人の寫人  
も最初拙者共を見掛けいと相見へ船を廻し  
方へ参り様を見へや此砂濱へ漕寄せらば初  
見掛の三人の外は都合二十人程の人数参り近寄

見へハ頭の残切サシキリまで髪は長くのを一面色は  
黒く御坐の異舳まで衣服は鳥の羽又獣の皮で  
作り物を着用いづく見馴ぬ姿は御座の故更  
人間と覺え不やの向より何う詞をかけ手招き致  
しへとも一圓通し不や何事も甚恐しく存り彼  
等早くあられと中事と見へ頻り手招き致し  
中此方招き程気味悪く存し上陸致し  
てハ是迄辛苦い取續き相凌ぎ命も是限  
危ぶまやの処乗組の内年寄の者共やハ

此小船にて逃げ延びるも成りや間々ニケ弥鬼人とも  
いり何きの道相逃カシき可や様も無之た人命を失  
ひいも一と先上陸のうへにやいふ皆く一又  
仕揚り可やと存内彼者とも初老より拙者共を  
漂流の者ともあつきいと相見え先つゝ船を引上  
い様の仕形致し彼者とも打寄り暫時引あげ  
られやい

船を引上り何きも陸へうつゝ嶋人共思ひの外の  
りよて男魚を持参り其桶或は皮袋に水を合  
持来り船は有之の鋤を指さし此品此所より煮て  
給い様も仕形つゝやい其上萱カヤの如き枯草を持  
参り是を焚き用ひ可やと火をたき舟を此砂濱  
に直り是を敷あへ皆々卧りいゆよと自身は寐  
て其仕形をいさし見せやい拙者とも最初サソより怖  
しく存い処彼等ハ早速より拙者共を漂流して  
殊の外艱難カニナシ辛苦して参り者とも合共致い様子御坐い  
併何かと氣味あゝゝの間今夜中、初らまはは  
杯やい処何きも至極疲まゝて不覚見其処をたし

かく即せりやい数ヶ月の渡き故と奉存の翌日  
より其後も嶋人等右のそく魚類并に焚物持参  
興へい故端船を合き来りい鍋を以て有合の米を  
もせりく宛炊き給やい島人の如何様の所は住居  
はいや外は人家とても相見へ不やい故彼者共仕形  
よて教へい通り持運ひ興へやい枯草を志き何きも  
其所は卧せりやい追く相考い所丑の土月より寅  
の六月迄海上漂流の間八ヶ月よして初免て上  
陸仕い

一男女の衣服見聞仕い知鳥の羽よて作りいその  
ちり其皮を羽毛のままむき綴り合せて着物  
に致し毛の方を内よして着服を女の服に  
其はき合せ免る右鳥の嘴を取り集免る  
其鼻孔へ糸を通し衣服の飾よく付く  
下けやい此鳥の嘴先き鈎曲り色は赤く本  
の方黄をみ見るある物は御坐い追々美い  
へい鳥の名「カクキヨ」といふよて御坐い

此鳥東奥蝦夷地「カクキヨ」楓虎嶋なる所の「カクキヨ」カクキヨといふもの  
似たり往年これを見たるものなり又其嶋人用り所よして

此帛を連糸合せたる物を所蔵する人あり借て是を漂客と云く所 此帛即彼「カクキヨ」鳥の羽角あり云々其服飾とカクキヨ所全く彼と同じ此鳥北海の寒地と産するとの見えあり蝦夷言「カクキヨ」ハ赤なり「カクキヨ」ハ鼻あり下に図あり「カクキヨ」とハ何の義なるを云々右の類人物鳥獸器物等下は図あり漂客物語の処の説話書き取り心を尽しかくれもの多し故に茂實門人の中画は心ある者を其席より伴ひ行きて漂客等説く処より新く小図を作らし先通編其條件の間に附して詳細を得せしむるものなり

一又着服に用る海獣皮ハ「コーシキ」と云物にて惣

身あゝかのこきくものく毛色薄黄形状大小

あり図下に見ゆ

此日此物の名を先年彼地は漂流し帰朝せし伊勢国の光夫と云く著し語ふ「コーシキ」ハ「コーキイカ」あるへ

「コーキイカ」ハ此地にある処の海獺一名海狸ありと云く光夫ハ此鳥は連糸の「カクキヨ」カ「カクキヨ」島は漂着せる男なり

一衣服の仕立かく男女共は筒袖にて物全体縫

詰唯頭首を容るゝ処をうりつけ置前後を

くくゝと縫合せ底をき袋の如く裾の方次

弟不廣く仕立たるものなりこれを裾より

かむりとの孔よりはむりを出し両袖を通

しはへ全く身は纏ひて筒様の仕立故婦人

其小児は乳を吸はせし節ハ裾の方より懐へ

入き乳を含ませ腹の通りより細帯をへん

連環の如く婦人様の置や  
 鼻柱この此穴子併色男一



横たへい小橋を魚売して担いだ  
 け上唇の上際までいぬりやい又硝子  
 もさげい是ハ「カロ」に船通用以後の  
 い髪ハ黒く長く夫をこちの  
 の結やうハ後ろの方ふて嶋田まけの  
 い娘の子ハ三つは組分けさきい  
 牛ハ耳輪のくまうへおき敷穴をあけ  
 やい鼻よう下けい様あるものを下けやい  
 巡寫々のなういゝゝゝ知少より  
 耳輪へも穴をあけらう

かの土地ゆゑ衣類の仕立方加様  
 やい  
 以て歩行仕の右の如くして面  
 脚坐い但婦女ハ顔色も白く自然  
 う方より大抵我國の婦人の如く  
 のう口の周りに入墨致し又鼻の障  
 部穴を穿つる牛鼻の如く  
 よ小き棒を通し小鼻を張る様

一此島の名を「カシテレイツキストロ」と申いこれも  
「カロシニア」より名付い名の「モトノナ原名ハ何と申  
いや「カロシニア」辞より嶋のりを「カストロ」と申い  
島人の惣名を「アリキツトク」と申い

伊勢光太夫話に「アミシヤーツカ」の北は「カシテ  
レイスコ」と云知あり嶋のりハ「カストロ」ツカと云  
島人の惣名を「アレキーツカ」といふと此これ  
同し名ありへ何と云正名ありや

嶋人いふやうの所は住居いや家作とてい見へ  
やさば尋廻り見いへ何と云穴居と見へ申い  
此濱の近辺は土窖ツキアナ有之い造りくこの様子を  
見い知平地へ深く穴を掘り蔭室ムロの如く致  
しいものなり穴の上ハ拾ひ集え置い流き木  
共を以て屋根の骨とす右萱の如き草を蓋  
かけ其上は土をかけ置い其真中ハ二尺四寸口  
をあけ置いこれ屋上の煙窓ケムダシと似多り此口  
則出入の所とす其口下は向い外降出入の  
梯の中りの物御座いこれ平ら丸ある木と

きりえをにつけぬ返の物も御坐の空<sup>アナ</sup>の内ハ  
人数の多ゆゑより廣狭御坐の様子見合  
此知樹木絶て生し不<sup>レ</sup>ヤハ林木<sup>ニ</sup>致し物き  
且風雪も嚴<sup>シ</sup>き嶋故<sup>ク</sup>様<sup>ニ</sup>平地へ深く穴を  
りり住居致しるふいへ拙者も最初<sup>ノ</sup>氣  
味あし<sup>ク</sup>存<sup>シ</sup>故入<sup>リ</sup>ても見<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>ヤハ<sup>ニ</sup>圖<sup>下</sup>見<sup>也</sup>  
廁<sup>カキヤ</sup>ハ別<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>谷間山石の陰けある<sup>ニ</sup>て  
二便共<sup>ニ</sup>便<sup>シ</sup>ヤハ女<sup>ハ</sup>よく心掛<sup>ヒ</sup>て見<sup>入</sup>へ  
右便用の様子お見かけ儀ある<sup>ニ</sup>

一同八日船頭平兵衛船中より水腫の症相煩<sup>ク</sup>度段々  
差重<sup>リ</sup>此所<sup>ニ</sup>て病死仕<sup>ハ</sup>外<sup>ニ</sup>致<sup>ス</sup>方も無<sup>ク</sup>御坐砂  
地を深く入り夜着をきせ<sup>ニ</sup>ま<sup>シ</sup>ふ<sup>ク</sup>埋<sup>メ</sup>ヤハ

一同十二日

鳥人<sup>ノ</sup>様子替<sup>リ</sup>羊頭  
カキヤ<sup>ノ</sup>見<sup>入</sup>者

皮船<sup>ニ</sup>乗<sup>リ</sup>皮<sup>ノ</sup>衣服<sup>ニ</sup>て

襟下より直<sup>ニ</sup>頭<sup>ヘ</sup>引冠<sup>リ</sup>服<sup>ニ</sup>  
下<sup>ニ</sup>牡丹<sup>ノ</sup>筒袖<sup>ノ</sup>服<sup>ヲ</sup>着<sup>セ</sup>ル

此所<sup>ニ</sup>着<sup>ル</sup>船<sup>ノ</sup>楫<sup>棒</sup>を

直<sup>ニ</sup>杖<sup>ニ</sup>は<sup>キ</sup>上<sup>陸</sup>す

是<sup>ハ</sup>刑<sup>ロ</sup>シ<sup>イ</sup>正<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>  
追<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>ヤハ外<sup>ニ</sup>嶋人

五人<sup>ノ</sup>鉄炮<sup>ヲ</sup>と<sup>レ</sup>せ又<sup>ニ</sup>前<sup>ハ</sup>八寸<sup>ノ</sup>を<sup>テ</sup>の<sup>ニ</sup>鉞<sup>ヲ</sup>をも  
たせ都合十人<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>参<sup>リ</sup>是<sup>ハ</sup>敬<sup>言</sup>固<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>為<sup>ト</sup>見<sup>入</sup>  
へい拙者共漂着<sup>ス</sup>の<sup>ニ</sup>此所<sup>ニ</sup>より刑<sup>ロ</sup>シ<sup>イ</sup>マ<sup>シ</sup>役所



御坐の所へ注進致の故吟味ぬ為参りいりり  
追々相察しやい

一魯西亜人の此嶋人の眼粉<sup>メサシ</sup>面色<sup>シ</sup>一体の容貌

格別相違身材も丈高く御坐い

一皮船<sup>カネフネ</sup>并皮の着服は島人の用い処也<sup>同下</sup>この

嶋へ相詰<sup>カクシ</sup>の<sup>カ</sup>ロシイ<sup>イ</sup>人の本国の常服の外は

犬の皮鹿の皮の衣服も作り用ゆ是土地格別

嚴寒故と見えやい

一右魯西亜人陸へどり拙者共向ひ何う様々やい

へとも是ましく言詰一向は通し不やい然る処<sup>カ</sup>ロシ

イアし人あつてを見配り拙者共の哨<sup>テシ</sup>船へ参り水等

二本を取て船の中一本たて何うやい又二本三本たて

何とうやい拙者共相察いには帆柱一本立い船のり

いや又ハ二本三本立いやと相尋い様子の仕方を

合具仕り一本帆柱よて乗来りい様子に仕方仕見

せいへえろちほきい趣き<sup>カ</sup>ロシ<sup>イ</sup>ホ<sup>シ</sup>とやいこれ日本あ

るうとやいうと存い故此方より<sup>カ</sup>ロシ<sup>イ</sup>ホ<sup>シ</sup>とやいへえ

初て日本人とち義相分りい様ある御坐い

一追々見聞仕のハ帆柱惣て外国ハ二本  
三本以上立いて一本の櫓日本ハ限りの様  
相見ハハ彼国の人日本船ハ一本の帆柱有  
る事知りて右体の仕方致し美り  
て日本人とヤリ相分り存らま  
日本人とヤリ様子相分りとい其人指図して泡印四  
カ先よりよせ拙者共へ與へ為給ヤハ食モテナシ  
ころと見ハヤリ鳥の卵アヒルの由家鳥の卵より

大ひく此鳥此鳥ハ夥く御坐いそん故肉も  
卵も食料より羽つきの皮ハ惣り合せ衣  
服も作りヤリ存ヤリ調下

一同十三日朝五時頃より南風吹右魯西亞人指図致し  
拙者共乗来ハ肺船を寫人ハおろさせヤリこれ  
ハ乗ハ様仕方いし右人とも一同乗組出船仕り  
同夜四時頃同島の内丑寅軒の方ハあつりハ小  
湊へ着岸す

一此処「カアツカ」とヤリ所の由ヤリ「カニレイツ」の内

よて魯西亜本国よりの出張りの処有之小  
湊と相見へい出船の場所より彼国の里法  
よて五十里程有之最初漂着の所より此  
所迄百里程と聞へやい

此所より三四百石積位の魯西亜船へ三十餘人乗組  
泰居陸よりも三四十人乗居の様子見へやい魯  
西亜本国より役人出張り致し泰居居りて三年  
めよ交代いよ由拙者共此所へ着岸後早々  
飯臺を居へ者有を以て振舞やい

此処へ詰合の船主り色く世話致し拙者共暫  
同知は滞留仕りり相成其間ハ濱辺へ流し  
寄の木を拾ひりけい傳等仕り冬ハ寒と氣至  
て強く働きも不相成り舟家内のりもの致  
居りやい

此嶋の中へ五月十日初て上陸仕り共人里無  
之場所故又船を乗廻り六月廿日漸々  
嶋人より出逢世話を受其所より逗留九日月  
よて此「アッカ」へ泰居りやい陸より三十日程

相成此所は只をこゝに記するは相成元亨年  
程同所は罷在り

一此嶋魯西亜本領地方より東の方より

北アメリカに属し由

一島の廣さ何程御坐いや知れず此邊前

後大小諸島あまた相并ひ居り趣御坐い

一此嶋の内樹木更に無之夫故薪も草の如き

草を用ひしを敷きものも用ひし草山は

生し草よりハ草ありかある物御坐い

一草ハ石防風相見へは日本の通は御坐い

一本文の皮袋ハ海獣の胞衣エラクロの由水并油の

類もなきやい

一食物ハ専ら魚類を給へやい魚類次以水にて

煮揚げ釜具の上のせ置きを以てむちり食

ひやの生ても給へやい給へ捨いまゝして其臭

の臭ハ居所も卧所もさゝ置取行付も不仕

穢しき体は御坐い土地は生しものにてハ

外なるくの間漢穢はり魚類斗用ひるゝ  
見へやん

一 鱈年中御坐の形ハ此方の品と同くやうにて  
但ちその方細くおしく太く御坐の形を「テレツカ」  
とやい年中の食物おもよ此品を用ひい趣  
御坐の一本を三つに切り彼萱の如き草に包  
み汐水と塩を加へ煮つけ其色色を解きむ  
きて給へやん又汐水にて煮揚の後肉を  
搗てかまはこ下地の如くふいて鯨の油又「アジキ」

あさ海菊「チル」の油を内に入きやん油のあさら  
し至りききこいて味も宜く御坐「コウシキ」ハ  
次に見へやん

一 鮭「タタ」鱈「コホーシヤ」比目カレイ「オホトス」も御坐の  
併此類ハ時節より取りやん青魚ハ四月初  
より取きて相用やん鯨「ケト」ハ別は穢ハ不仕  
自死の物流を寄ひる折く御坐のを取り  
て給へやん

一 鵜鳥ハ有之い鳥ハ形大く鳴声人を呼ひい

如くアアアアアアの様も聞かぬ

一 端の如き歎鳴声并尾も杭も似やん先は赤く  
見へ山樓やんを見うけやん嶋人これを見せしと

やん

光太夫曰杭を「カロシイア」してハ「カシ」して  
とこれ又やまう杭あるへき

一 海歎を突留モリの如き道具御坐ミの長さ五六  
尺ホヤキ鋒突ホヤキ火打石の黒き様ある石をこく  
とをやんこれを使ひて海歎をこくやん

甚く辛小入りたる事御坐ミ又飛鳥を

一 此道具ツつて突落ツやん

図下に  
見ゆ

一 此道具を供ふる嶋人至く辛鍊ツ居ミ

趣ツの知れよう為習ミの事と相見へ子供等も

常く陸より習居ミやん先年カロシイア人此

嶋を従へし初嶋人大勢海側へ打寄本国

船ツの向ひ此道具数千本を而の降る如く

おけかけ中々寄り付やへき様もなぐ大難

羨惑ツ怪我人も夥しく出来ツよ

兼りやい殊に此黒石毒有りて肉中へ入り  
へい其所くさましい夫故療治致いよ肉を  
そきやい由此節 詰合の「コロシ」に人の内老人  
一人御坐い先年其船に参り合せ怪我いせし  
痕有りて<sup>ヒナ</sup>骨を出し 見せぬ肉<sup>クホ</sup>陥み居  
やい

按此石は我國東蝦夷地より昔の根に用る「アジ」  
と呼ぶもの似たり「アジ」は堅田炭の産なり

一 詰合の「コロシ」に人まゝ此器をかき習ひい者ある  
由よりへとも中々午に入不やい「コロシ」により持渡

置い鉄炮は島人却て能覚へいよ

一 魚の皮ふて張りいて造りの船<sup>國下</sup>見りよ棄い獵に

出い其船の両側よ此線<sup>カ</sup>を結付やい

一 漁獵に網を用ひやい是の「コロシ」に人通用以來

の事れよ

一 此島殊の外寒地より此節六月にへとも谷

川の内中程は氷解け流きいへ大岸へは氷り詰

居やい

一 島の内土石沙利は日本に何も替り無之い

一 女の惣て縫もの指ものれ類いたし見事成  
 手際よて針ハカロシイロより渡り由尤獵の  
 手傳をもい〜

一 男ハ専ら漁獵仕

一 男女共に髪ハ黒く男の髪ハ頂とて前後  
 へかきまけ後の方ハ襟の折とて前より前眉  
 の上際とて前かまろへやい

一 麻布とて梅の下着を着居る者もまゝ有之  
 是もカロシイロ本國より渡り物

一 着もの襟の廻りハカロシイロの  
 毛皮をはけいも御坐

カシデレイツケ島  
 穴居并嶋人其  
 土室へ出入之図





「コシキ」圖

コシキハコシキ

ありーコシキ

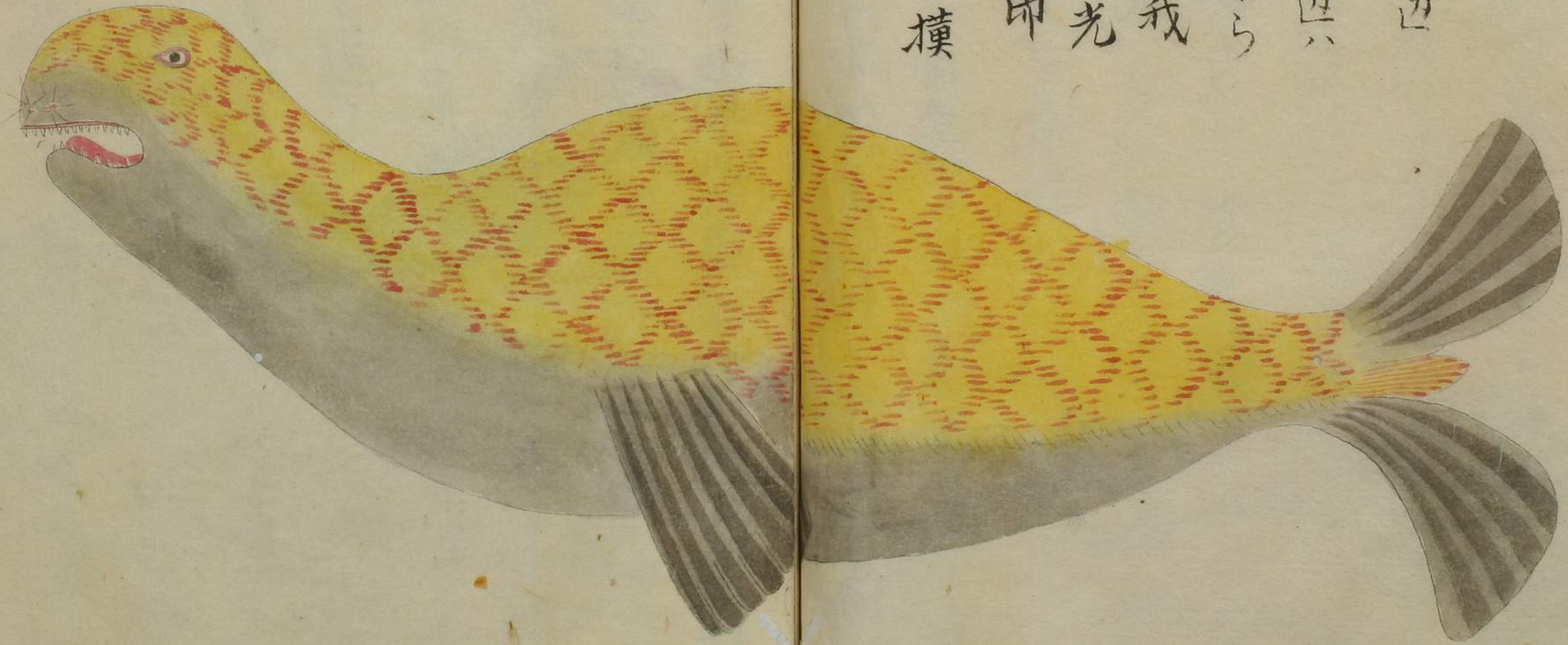
此島の近海に専ら

獲るるものにて我

海シカの海獺ありと光

太夫云々故に即

其真図と云ふは横



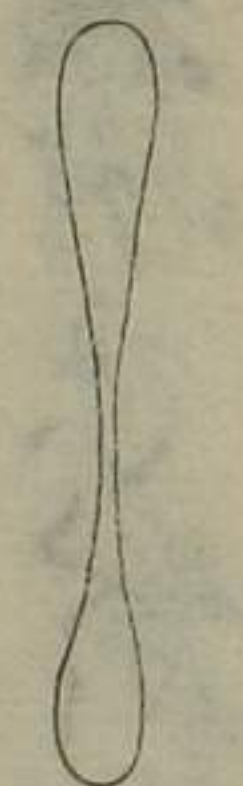
オクキヨ鳥之圖



一「ナアツカ」在留の魯西亜人の居処ハ平地の上ニ材木を  
 横堅ニ圍ミトニ枯草を並へテ土を掛テ覆ル合  
 ハ横キニあり其所ハ少シ土を陥め置テハ板のひ  
 らきアなり屋上の真中を穿用ニ開キ「セイウ」の  
 皮をちる也透き通りテ明りこまらる尤雨雪を避く  
 入口博風の如く所々向ふの横面ニ「硝子障子  
 を仕えめたる也」硝子板、本國  
持来由室中ハ長屋の如く仕  
 切りあり此皆板敷ニテ腰掛も並へ置り通用ハ  
 真中ニテ面々ノ寐所ハ各仕切りあり此土室

一ヶ所は四十人程住居を 図下 家る内外居住  
は二嶋人を用ひ島人の穴居は前図のうくこ  
に異あり

一嶋人の楳は用ひい皮船は上より見いハ形龜の  
甲のうくこして中は穴をあけ御坐い是ハ  
人の乗りの口なり一人乗りの真中は一ツ三  
人乗りの三所はあけやい何きも人の入程  
御坐い一躰さんや船程の長さよて細  
一ツ三人乗りの長さ三間程は御坐い人其穴の内

へ入りきりて腰より上半分外はあ  
腰の知よて其廻りいりやい船は皮よて  
さうつえい物也其穴の知いをりくを袋の  
かすの如く紐を通し置き人其穴の内は  
座り其紐を引きへ腰の周りをむき志先て  
くうつけやいこい船荒浪の中へ入ても船  
中へ水の入さば身體も轉動不仕様致い  
ものと相見へやい杼ハ  筒様の  
物よて其真中をもち左右へはうひて漕やい

此船乗りやうあり、ハシ反轉ハシするや島人の乗  
るを見らふ海岸へ船を横付ハシし置く彼穴の  
内へ先斤足をいき又次は一方の足を合ハシら  
夫より坐り方はあんなにありて居りつき  
棹を使ひあらし乗出たり上陸の時も棹を  
杖ハシはき腰のきり様はかけんあつてとる  
其あんなに能鍛錬と見え何の造作もなき  
也夫故乗るもあかるも更なるつらう入る  
るハシ

一 楫ハシは出る、ナギ汗の目を見合せ出る故腰のハシ  
も引ハシさへやさ次ナギ渙ナギりの臭ハシ共は腰の間より  
船の内へ入るやいとし風烈ハシく浪荒く成い  
て例のハシ腰のハシ引ハシくやい  
一 船は自然とよき程は曲りい木を見揃ひ置  
其下地を揃ひ其上へ皮をとりハシ皮はハシセイ  
ウチと中 海獣の皮ハシ御坐ハシ  
一 其皮をたき取りハシ生皮ハシより幾枚も両方ハシ  
小口と小口をハシ合ハシせ縫ハシる糸ハシめを

外へ出さぬぬひいて幅廣の物は仕いを用やい  
糸ハ鯨の骨助にて御坐い

按は此鯨筋ハ日本にて綿糸  
弓の弦は用る天真カと云ふ

物と同先針にて穴をあけ置 跡より糸を通

し其の糸の先は爪の毛のこいき知をより

かみ通しやい板左右より引めて縫合せ

むつたりとゆるな縫目知きさるやうに致し

やい至て午際あるもの御坐い

爪の毛をより  
かみ通しやい糸

ぐちほきや  
故と聞へやい

一 鯨の筋ハ自死の鯨流きよりたる時より貯へ

置き「セイウチ」の骨助て紛鍾の如くに作りたる

物にて糸にゆるかり

此品様平持糸  
下は図あり

一 右皮の縫合の処水やも不通様といたり縫合せ

て後其縫目よけつけ吹きうて試息のときぬ

程は仕い即これと船下地の木へ張かけ縫付やい

木にて造うい船にて別は無御坐い此皮船を

より寫人午作りたいたし用い石をハイタヒとやい

「セイウチ」ハ海獣なり牛馬より頗大より毛淡紅

頭ハ馬より短し上髪両側より白く生さく長牙

二根と銀ハクキより生へ外へ垂ま下り象牙の如く

上鏝丸右より一根宛出ツ形圓く徑り本の方

よて二寸より五寸程長き二尺位より三尺程

迄も御坐ハ此牙形も色も象牙の能似ハ色く細工物ハ使ひ

ハの使節献上心當と相見えハ此牙長サ二尺位より二尺五寸位までの物

ハ百五十本持渡りハ物惣て御さうとあき故皆く持戻りハ事と

相見えハ四脚ありて蹠ミツカキあるる海嶺アシカの類に似ハ皮ハ

牛皮よりハゆゑ薄く毛ハ去りハいて舟へさる

其外ハのるハも用ハかハい

此獸折く陸へとりやハ水獸故陸ふてハ

自由小行きか祢ハ是を棒ハ鍼ハかハい

亦殺ハきハかりハ國未見

按る小和蘭書ハ氷海の産セイパールト一ニセイ

ガルワシとソハ物の図説あり此セイウ山と思ハ

海、かり

17

自由の権利を主張するは、  
法律の範囲内である。  
法律の範囲外に自由を主張するは、  
法律の範囲外である。  
法律の範囲内には、  
自由の権利を主張するは、  
法律の範囲内である。

